

月曜日のオンライン朝礼の折、子どもたちに健康診断の話をしました。

今から百四十年ほど前の明治時代、「健康診断」は「活力検査」と呼ばれていたようです。この「活力検査」が「身体検査」に改称されたのは、日清戦争後だとか。

第二次世界大戦後は「健康診断」に改称され、この文章がアップされる頃は、まさにその「健康診断」まっ最中と言ったところでしょう。

私が担任をしていた頃の話。健康診断の前日、三年生の国語の授業だったでしょうか。

肘や膝を混同する児童がいたために、肘はここ。肘打ちとか肘鉄砲をするところ。ひざはここ。膝蹴りをするところ。ただし、お友達や先生に決してやってはいけないと、わざわざ念を押し、そこで本題に入りました。

「膝の後ろのくぼんだ部分を何と言うでしょう？」最初が「ひ」。その後は三文字。あと三文字の物は教室内にある物。ピカピカ光る。などとさんざんヒントを出しましたが、「ひめだま」や「ひがらす」など珍解答が続出。正解の「ひかがみ」を一発で言い当てたお子さんはゼロでした。

次の日。健康診断当日。内科の検診の際、担当のお医者様に「ひかがみが痛いです。」と訴えた我がクラス児童あり。それを聞いたお医者様が「ひかがみ」なんて、難しい言葉

を知っていて偉いなあ。」と、おっしゃったのだそうです。

その後、褒めていただきたくてか、本当に痛かったのか真相は定かではありませんが、「ひかがみが痛い。」という児童が続出。我がクラスに謎の伝染病「ひかがみ病」が発生したと養護教諭から笑顔で報告されたのを、昨日のことのように思い出しました。



今回の健康診断、コロナ禍のために、色々な制約、制限があります。一年生、二年生の担任と六年生担任・養護教諭で話し合いをしてもらい、六年生に一、二年生の誘導、お世話係をお願いすることにしました。極力話さない、ペタペタ接触しない。密にならない。手指の消毒もきちんとし、廊下や会場の換気にも注意して実施することにしました。

現在本校では、学年を越えての接触を極力無いようにするため、縦割り活動などを原則停止にしています。

このコロナ禍の中で、各種行事が実施できなかつたことや、学年をまたいで接触が無いようにと、児童会、クラブ活動等も停止してきました。

その中で見えてきたのは、学校の行事が、単に学校生活に彩りを添えるためのものではなく、子どもたちの非認知能力を高めるためにどれだけ役立ってきたのかということです。これは本当に、痛切に実感しました。

今回の健康診断、はっきり申し上げて、六年生にとつて一、二年生の誘導は、色々な制約もあり楽なことではなかつたと思います。それでも六年生諸君には、一肌脱いでいただきました。

その経験の中から、創意工夫、共感、思いやり、粘り強さ、自己肯定感、達成感といった非認知能力の芽が少しでも育ってくれたらと、祈るような気持ちで教員たちは見守って来たことと思います。一、二年生たちも、上級生への信頼感、憧れ、安心、あたたかさをきつと肌で感じてくれたことでしょう。

診てくださったお医者様や先生に「お願いします。」「ありがとうございます。」を言うことができないので、目を見て礼をするようにと言いました。このような時期に学校にお越しいただいたお医者様に、子どもたちの感謝の気持ち伝わると思います。

この経験によって六年生のみならず、お医者様や六年生に心の底から感謝できた一、二年生は、きつと何かが変わるような気がしています。